

目的 農山村の生活においては、高度経済成長期に流出した家族員が、都市生活を営み、ときには、子供づれで里帰りをする過程で、外孫を通して食べ物のみり方が変化する傾向も見られたが、今日では農山村居住者自身が行動範囲を広くし、兼業通勤先の町で食物を購入する機会が多くなり、また村にある商店の食品も多様化し、必然的に日常の食生活は種々の側面から変容してきた。そこで、米および自給食品の生産と消費構造について継続調査を行ってきた過疎農山村の新潟県・小国町において、さらに次の様な調査を実施し、農家の食生活構造の、どの部分が変化しているのかを明らかにすることとした。

方法 農家が自給野菜を多く利用する時期の夏季を選び、連続した3日間9食についてそれぞれ、献立、調理形態、供給方法別に、使用した食材料を調べ、またそれらが、どの様に盛り付け配膳され、家族員の誰が喫食したか、などについて調査した。その他、各農家より農業従事者一人の生活時間調査を行い、一日の消費エネルギーを算出した。

### 結果

1. 調査農家の世帯主のみならず、世帯主の妻も一般に消費エネルギー量が多い。
2. 平均一人一日当りの米消費量は、全国農家平均値以下の農家が半数近くみられる。
3. 副食に使用した一日の総食品品目数は、一般に多い。
4. しかし、平均一人一日当りの米消費量と総食品品目数とは一定の関りはない。
5. 副食のPFCエネルギー供給構造について、各農家で供給された食品のバランスをみると、蛋白質食品の供給率が高い傾向にある。